

## 全国力を借りながらの救助活動

胆振東部消防組合  
 当時消防署長兼消防本部防災課長  
 (現消防本部消防長)  
 当時消防本部防災課長補佐  
 (現消防署長兼消防本部防災課長)  
 松永忠昭さん  
 稲葉博徳さん

——胆振東部消防組合の組織と役割を教えてください。

松永 胆振東部消防組合は、安平町、厚真町、むかわ町の3町で構成し、厚真町



松永 忠昭さん

には消防本部と厚真支署、上厚真分遣所、安平町には安平支署と追分出張所、むかわ町には鶴川支署および穂別支署があります。その中で本部は、全体計画や総務、許可事務などを取り扱っています。

——震災当時の胆振東部消防組合の動きを教えてくださいませんか？

松永 私が本部に到着したのは午前3時25分です。まだ暗かったので全容はわかりま

せんでしたが、道路の亀裂や液状化により大変なことが起きているのは伝わりました。胆振東部消防組合消防本部は厚真支署の2階に事務所を置いています。散乱がひどいため、1階で指揮を執ることにしました。初めは状況がつかめない中で、連絡が入ってくると対応するという状況だったと思います。

午前3時42分に厚真消防団から「吉野地区が大変な状況になっている」と連絡を受けて、タンク車を出動させました。しばらくして「土砂崩れで朝日地区から進むことができない」「その先でも土砂崩れで人が生き埋めになっているが、通行できない」と無線が入りました。時間をかけて道を探しましたが、どうしても到達できないと



胆振東部消防組合消防署 (胆振東部消防組合提供)

なった時、同じく家屋が倒壊し生き埋めが発生しているとの連絡のあった美里地区にシフトしました。吉野地区には自衛隊と消防のヘリコプターが入り、救出に当たっています。このほか、木炭小屋で発生した火災の現場へ消防職員を派遣するなどの対応も取りました。

午前4時55分に苫小牧市消防本部から「状況が深刻なようだが、応援は必要ないか」との連絡がありました。北海道内の消防は相互に広域応援協定を結んでいます。すでに町の災害対策本部から「できるだけ消防力を集めてほしい」との指示を受けており、すぐに広域応援要請を行いました。消防にはさらに、都道府県をまたいで応援に駆けつける緊急消防援助隊という仕組みがあります。地震と同時に北海道が消防庁長官を通して、おもに同じブロックである東北各県の消防に出勤を要請していました。

全体の状況がわかり始めたのは発災後1時間ほどです。5時までに、人的被害は少ないと安平支署と鶴川支署から連絡がありました。消防本部から距離的に遠いむかわ町の穂別地区の状況はなかなか把握できませんでしたが、各支署に詰めている本部職員

には「地域の詳細を把握し、来られるならば本部に来てほしい」と指示を出しています。稲葉 発災時、私はむかわ町の自宅にいました。巨人の手のひらの上で揺さぶられていたかと思えるような大変な揺れでした。「間違いなく津波が来る」と思いすぐにラジオをつけましたが、津波の心配がないことを知り、自宅内と隣近所の安否を確認して、15分後くらいに鶴川支署へ向かいました。途中、近所で納屋などがつぶれているのを見て「大変なことになっている」と思いましたが、支署に着くと上司の松永と連絡が取れ、「来られるなら来てほしい」と指示され本部へ向かいました。途中で部下から電話があつて「松永署長が広域応援要請をかけた」と聞き、「いったいどういう状況になっているんだろう」と思いますが本部に到着したのは午前6時頃でした。



稲葉 博徳さん

す。実はこの少し前、午前6時17分に札幌市消防局の防災ヘリコプターが厚真町のかしわ公園野球場に着陸しています。札幌市消防局の本隊が到着したのは午前11時23分ですが、この間にも胆振や日高地区などから広域応援の部隊が次々と到着しています。本州からの緊急消防援助隊としては、午前11時13分に仙台市消防局の指揮隊がヘリコプターで到着しました。厚真支署の1階には、広域応援隊と緊急消防援助隊の指揮所が設けられ、我々と連携を取りながら対応に当たりました。

緊急消防援助隊の本隊が翌日にフェリーで到着する予定でしたので、部隊の宿営場所を確保する必要がありました。めばしい場所はすでに自衛隊が展開していたり、地盤に亀裂が見られたりと、確保に苦慮していました。北海道の災害対策本部に依頼し、北海道教育委員会を通して厚真高校を借りることができました。

——応援の消防隊が到着したのは何時頃でしょうか？

松永 最初の広域応援隊として苫小牧市消防署の4隊が到着したのは午前6時22分で

——応援部隊が到着し、態勢が整ったあとの活動について教えてください。

松永 すべての組織は、町の災害対策本部の指示により活動します。町の災害対策本



1次派遣隊が一堂に会しての緊急ミーティング（胆振東部消防組合提供）

部に、我々、広域応援隊、緊急消防援助隊がそろった時点で、それぞれの活動地区を決めていきました。胆振東部消防組合は10〜15名の活動隊を1隊、さらに比較的被害の少なかった安平支署からも1隊を現場

応援隊が、胆振東部消防組合や厚真支署が通常業務に戻るまで残留してくれました。厚真町では余震が続いていたので、地形の亀裂、住宅や防火対象施設の確認作業を続けました。私は防災課長を兼務していたので、石油備蓄基地などの危険物施設の被害状況確認も実施していました。通常業務に戻ったのは、広域応援隊が引き上げた10月21日です。

――発災から2年が経ちましたが、今振り返っていかがでしょうか？

松永 私たちは北海道南西沖地震や有珠山噴火、東日本大震災でも出動しています。受け入れ側となるのは初めてのことでしたので、「やらなくてはならないことがこんなに多いのか」と驚きました。広域応援隊や緊急消防援助隊の受け入れが大変でした。最初は受け入れ場所を確保すればよいと考えていましたが、それ以外にもヘリコプターが発着できる場所を多数確保しなければならぬなど、短時間で行わなければならないことがたくさんありました。

最近の消防車両はサーチライトで遠くを照らすことができますが、土砂災害の捜索

に派遣しています。また厚真消防団も24時間の捜索活動に当たることになりましたから、ここにも数名の職員を配置しました。このほか、応援隊のナビゲーター、余震が起きた時の避難誘導、給水作業、夜間巡回などにも職員を配置しました。

――救出作業はどのように行われましたか？

松永 現場には我々のほか、自衛隊や警察も入っています。まず重機で掘り進み、何か出てきたら止めて、スコップで土を取り除き、土だけになったらまた重機で掘る。これを3〜4時間間隔で交代しながら、自衛隊、警察と共に作業を続けました。消防も重機は持っていますが、崩れた土砂の量はとも消防の車両で対応できるものではありません。自衛隊の重機をおもに使いました。最後の行方不明者は6メートルも下に埋まっていたので、手掘りではとても到達できなかったでしょう。

稲葉 この方の発見は9月9日の午後11時20分ですが、最終的に救出できたのは深夜2時過ぎでした。

松永 身体の一部でも見えたら「発見」と

現場まで行くことができなかったため、移動式投光器を多数用意しておくべきだったと痛感しました。

事前の計画で、災害時には消防組合の中で助け合うことを想定しています。今回3町全部が被災したことで想定が根底から覆され、初動からただ流れに任せるだけになってしまった。3町全体が被災することを想定した計画が必要だということを実感しました。

一方、発災当日の夕方4時半ぐらいまでに行方不明者を把握できました。厚真支署では家族構成などを記載した独自の住宅地図を作っていたし、毎年、一般査察として住宅訪問も行っており、地域との結びつきが強さが早期の把握につながったと思います。

稲葉 「災害は忘れた頃にやってくる」という言葉が

なりませんが、初期段階では伝わっていくうちに「救出」となり、救急車が出動しても現場で何時間も待つことがありました。そこで入ってきた情報を再度確認して、裏が取れたから救急車を出動させるようにしました。

――探索作業の間、お二人も本部に詰めて対応に当たられていたのですか？

松永 最後の行方不明者が見つかるまでの6日間、本部の職員は誰も家に帰っていません。厚真支署の職員は車庫に簡易ベッドを設置して仮眠していましたが、休養は取れていないと思います。私もアドレナリンが出ていたのか、疲れを感じないというか、疲れを感じる暇がなかったと言えます。稲葉 行方不明者が早く発見されてほしいという気持ちでいっぱいでした。地震が発生した日からまったく家に帰っていなかったため、停電で携帯電話が使えなくなった時は「自宅はどうなっているだろうか」という心配もありました。

――通常業務に戻られたのはいつ頃ですか？

松永 道南地区（胆振・日高地区）の広域

ありますが、「忘れる前にやってくる」と言っても過言ではありません。いつ何が起これたら、こういうことをするんだという準備、それが大切だと改めて思いました。

松永 個人的に印象に残っていることは、緊急応援隊が宿舍として利用していた厚真高校の教室の黒板に、「けっぱれ厚真高校」「地元を守りに帰ります」などの温かい言葉を残してくれたことです。消防仲間のつながりっていいなと思いました。



救助作業への出動に備えて待機する1次派遣隊（胆振東部消防組合提供）



昼夜を問わず続けられた捜索作業（胆振東部消防組合提供）